

# 視 座

## 可能性大きい修学旅行受け入れ

### グリーンツーリズムで本物の庄内を体験



庄内観光  
コンベンション協会  
高山良雄

今、小・中学校の教育現場で注目されているのは、平成十四年度から導入された「新学習指導要領」の実施にともなう「総合的な学習の時間」である。現代の子どもたちが抱えている問題として、体験の欠如やバーチャルな世界に対する依存の弊害、異年齢集団とのふれあいの欠如からくる対人関係の対応の未熟さ、感動体験の欠如などが指摘されている。そのような諸々の要素から教育旅行の在り方も見直され、従来の「見る修学旅行」から「体験型修学旅行」へと旅行形態も変化しているのである。

ものである。  
本物体験、感動体験を中心に、より多くの自然体験や生活体験を通じて自然と人間との共生の必要性を実感し、二十一世紀の最も大きな課題である環境問題を身近に考える機会を提供しようとするものである。同時に、地域社会のインストラクターや指導者の方々と人間的な交流を通し、職業人としての厳しさ、人の優しさやぬくもりを知ることが出来るメニュー構成になっている。

### 新たなビジネスチャンス

### グリーンツーリズムを推進

これに呼応して各県、各自治団体、各観光協会等が修学旅行誘致の千載一遇のチャンスとばかりに、地元色を濃く出しながら獲得に必死である。わが協会も庄内の独自性を打ち出し、庄内十四市町村からなる多彩なメニューを織り込んだ教育プログラム「入門庄内塾」を作成した。その内容は、海あり、山あり、川あり、そして島ありの恵まれた自然環境の中で、自然や人とふれあいがら学び、

創り、体験する、より高い学習効果を狙った

特に東北地方が修学旅行の誘致に力を入れているのが目立つ。観光行動が多様化し、観光客が団体から個人へと大きく変化している中で、学校が毎年確実に実施する修学旅行は観光地側にとって大きな魅力である。しかも旅行内容が良ければ強い記憶となつて残り、リピーターとして再度訪れ得る年代であり、口こみでファン層が拡大されることも期待できるのである。少子化が叫ばれる中で交流人口の拡大は大きな課題である。

経済的な波及効果を考えても、わが県の農業粗生産額よりも観光消費額の方がはるかに

体験型修学旅行の促進には、農業の再生が不可欠である。昨年度、首都圏の教員を招いて説明会を実施したが、教師たちが最も興味を示したのは農家民宿であった。農作業のほかに、わら細工、そば打ち、うどん打ち、豆腐作り、バター作りなどの体験による指導者と生徒とのふれあいの中から、生徒たちの心の中に他者を理解する視点が形成される教育的効果への期待が示された。

一方、受け入れ体制の課題も明らかになった。生徒たちは民宿のオーナーやそのご家族と寝食を共にすることになるが、民宿を経営する方々の間で生徒指導にどう対応するか、

基本的な共通基盤を確立する必要がある。同時に個々のご家族の個性を、どこで、どのように発揮すべきかも課題である。兼業農家が多い中では、対応の仕方にかんがりのバラツキがある。グリーンツーリズムの発祥地のヨーロッパでは、日本のように減反に補助金を出すのではなく、農業を続けながら民宿経営を行うために施設造りに一定の助成金を出し、民宿で得た収入は農業所得とみなし、税の優遇措置もある。若者たちの農家離れを防ぎ、



クロマツの枝打ち・下草刈り体験

庄内の健全な農業を確立するためにも、今後の大きな検討課題である。

### 体験型観光は人なり

見るだけでなく体験型の観光となると、そこには必ず人が介在する。農業、林業、漁業でも、伝統工芸製作の体験、自然環境の体験、味覚体験など、人がいかにかわるかが重要であり、人なしでは企画できない。

「入門庄内塾」のメニューはむしろ企画内容、演出の仕方、インスタクターやアドバイザーの技術など、素材そのものよりも人のこだわりや思い入れなど、人の熱意が勝負である。体験修学旅行を企画するには地域性や各学校の事情も考慮しなければならない。なぜ庄内まで来て体験するのか。ただ「体験させれば良い」という風潮が教育界の中に見聞される中で、バーチャルな体験ではなく庄内らしい「本物を体験させる」土壌を作っていくかなければならない。素朴な心のふれあいができる農家の方々や、地元のインスタクターとのコミュニケーションができる演出家が必要である。例えば、ソバ打ち体験ならば、ソバの植物としての特性、食品としての長所、ソバ打ちを行う上での留意点等について事前に学習されれば現場での実習がより効果を発揮できよう。また、ソバ畑の様子などにもふれながら実習を行い、体験の場でインスタクターとのふれあいなどに演出を加えることによって、生徒たちはより興味深い体験ができ、より大きな感動となり、思い出深いものとなるであろう。

### 体験型学習は地域振興なり

プログラムは本来、その土地の自然、生活、産業、歴史、文化に根ざしたものであり、そのような関連性があるものでないと学校側は選んでくれない。両者の目的が明確であれば、信頼され庄内を必ずや訪れてくるであろう。そして、交通と宿泊と飲食と物産とにつながる、地域おこしになる。昨年、説明会で実施した、東北公益文科大学での環境講座や、市立美術館裏での下草刈りなどは、まさに庄内しか体験できない本物体験であり、オリジナリティに富んだ地域間競争に勝てるまさにオンラインワンのメニューである。一方、刃物の取り扱いなど危険防止についても、今後十分検討していかなければならない。いずれにしても、このポテンシャルの高い庄内のフィールドを守り、自立できる庄内を構築するために、官民を挙げて知恵を出し、汗をかかなければなるまい。

#### 高山 良雄

庄内観光コンベンション協会。  
鶴岡市出身。中央大学卒業。

66年(株)日本交通公社入社。銀座支店、酒田支店を経て、88年(株)JTBに社名変更。川越支店営業課長、鶴岡支店長、酒田支店長を経て、99年JTB東北へ移籍。庄内観光協議会へ出向。2000年庄内観光コンベンション協会へ出向。現在に至る。